

## 5才まで言葉のでなかつた言語遅滞の 男児の一症例

(3年間にわたる個人治療及び母親のカウンセリングの経過報告)

研究第六部 野田 雅子・権平 俊子

本例は、2才8カ月になつてもなかなか言葉がでないという主訴で相談を依頼された男児を、1年間ときおり観察し、3才8ヶ月より個人治療を行い始め、途中より母親のカウンセリングもあわせて行つた。5才頃より言葉がではじめて、すつかり治療を終了するまで3年間経過したが、これはその事例の報告である。定期的な個人観

察及び治療は、昭和37年6月22日より1週1回1時間行い、40年3月22日まで103回行つた。母親のカウンセリングは、個人治療8回目の9月7日から個人治療と同じ時間に平行して95回行つていつた。但し、このうち、母親が病氣その他の理由で父親がつきそつてカウンセラーと話し合つたことが7回あつた。

### I 序

昭和30年より言語障害をもつ子どもの心理療法を行い始めて、何人かの子どもの治療を行つてきたが、日本ではこの種の研究はその緒についたばかりで、治療者自身もまだまだ学ぶことが多く、新しいケースにぶつかつては、あれこれ文献をひつくりかえし、諸先生方の助けをかりつつ、何とか子どもの障害をとりのぞこうと日々努力しているところである。

はなしことばとパーソナリティとは非常に密接な関係にあり、器質的な言語障害であれ、機能的な言語障害であれ、何らかの心理的問題をひきおこし、親子関係に悪循環を生じさせ、子どもの正常な発達を阻害することがあり、こういう言語障害の子どもには、心理療法が非常に効果的であるという実証を得てきたのである。言語障害

の子どもの治療といつても、言語訓練的な面のみに重点をおくのではなく、障害をもつた子どもの全人格を受けいれ、子ども全体の正常な発達を助けてゆくことが何といつても大切である。また、母親が子どもの治療に参加することが必要な場合もあることを見逃してはならない。

本例は、「ことばがなかなかでない」という主訴の子どもであつたが、いわゆる知能遅滞による言語遅滞ではなく、言語障害として非常に珍しいケースであり、果して、われわれの療法が本児に適切であるか疑問であつたが、治療をすすめてゆくうちに、やはり効果的であることがわかり、また、母親のカウンセリングも、本児の治療には欠くことのできない大切な過程であつたことをわれわれは経験したのである。

### II 本児の生育歴

(昭和36年6月2日、母親が本児を伴い、A病院の婦えりに立ち寄つた時に、母親より聴取)

#### (1) 出生状態

○父が31才、母が28才のときに第1子として出生  
○頭がつかえて、麻酔を使用、前日の午後6時より翌朝の6時半までかかつた。胎中で胎便を排出。○生下時体重3,500g。○人工栄養で、牛乳はよくのんだ。離乳は5ヶ月

#### (2) 発育状態

○首のすわり 4ヶ月、○おすわり 7ヶ月、  
○はいはい 9ヶ月、○ひとり歩き 1才4ヶ月

(母親は、生後1年までは、発育は順調だつたように思うと言う。)

#### (3) 既往症

○1年3ヶ月の時—38°~39°の発熱が2日つづき、注射でさがつた。それに続いて半月の間に、突発性発疹、風疹にかかり、また肺炎にもなりかけた。

#### (4) ことば

○1才頃、パパ、マンマということばを両親が教えこんでやつと云えるようになっていた。しかし、現在はこれはいえなくなつてしまつている。ただ、アーアー、カタカタ、グドウグドウのような音はだしている。

(5) その他問題と思われること

- 1) 食事でたべられないものが多い—白ごはん、かたいもの、繊維性のものがたべられない。
- 2) 排尿—まだおしえず、おむつがとれない。
- 3) 夜泣いてねつきがわるく、病院より安定剤をもらって服用している。
- 4) 家では玩具を沢山買い与えてあるのに、ほとんど玩具あそびをしない。
- 5) 他人とのコミュニケーションがないように思える。人にさわられるのをきらう。
- 6) 運動神経—歩くとき、前かがみに走るようなかつこうになるので気になる。高いところ、ゆれるものをこ

わがる。

7) 音に対しては敏感であるように思う。

(本児はみたところ、丸顔でポチャポチャし、全体に非常に赤ちやんばい感じであるが、顔つきは正常でむしろこうそうにみえる。)

(6) 家 族

○父(35才) 大学卒、大学助教授、○母(32才) 高校卒、卒業後、暫く銀行で働いていたことがある。

○父方の祖父(66) 祖母(60) が同じ敷地内に、はなれて生活、時折訪ね合う程度、○住居は、山の上の静かな環境にあるとのことである。

Ⅲ 観 察 経 過

ふつう2才すぎてもことばがなかなか出てこないという場合、われわれは、先づ①知能遅滞ではないか、②聴覚に欠陥があるのではないか、③出生時の障害か、2才までの間にひどい病気で、脳がおかされたか、麻痺がおきたか、脳炎の後遺症のために言語野に影響を受けたのではないか、或いは④家庭環境が、子どもの言語発達に好ましい刺激を与えることができなかつたのではないか、または、⑤特別な、情緒的にショックを与える出来ごとがなかつたかということなどについてしらべてゆくが、その他、小児精神病や、自閉症、小児失語症、聴啞の子どももあり、診断は相当難しい場合がある。本例の男児の場合も、みたところ知能遅滞による言語発達の遅滞とは思われなかつたが、いろいろ疑わしい点が多く、診断は困難をきわめた。

(1) 第1回目の観察 昭和36年6月6日

両親にとまわられて来所。始め両親と一緒に個人治療室に父にだかれて入り、父親が本児をおいて母とでてゆこうとすると、泣き顔になつて父にかじりつき戸口まで出てゆこうとする。そのうち色々な玩具にひかれて、両親がでていても気づかず、床に坐りこんで、人形あそびの小さい机や椅子をつぎつぎ箱から出して手にもち、ウン、ウン、カタカタ、グドウ、グドウのような音をだす。名前を呼んでもふりむかない。玩具をいじりながら、時々一人でうれしそうにニヤニヤ笑う。玩具の電話のベルの音にはふりむいたが、鐘やたいこの音には無関心。治療者がそばによつて話しかけても下をむいて玩具をいじつていて反応しない。30分近く坐つたままで、玩具であそび、時間の終り近くに部屋の中を走り始めたが、母親の報告のように前のめりになつて、かなり敏捷に走りまわる。この前の母親の報告では、自閉症

的傾向もあるように思われたが、このときの40分位の観察では、確かなことはつかめず、ただ、聴力に問題があるのではないかという懸念が持たれ、父親も、どうもきこえていないように思えるときがあると心配していたので、先づ聴力検査を受けるように、I大病院のT先生を紹介し、その結果を持つこととした。

(2) それから1ヶ月後の7月7日(夕方)

祖父と母に伴われて、治療者の研究室に立ち寄つた。I大病院に何回か通つて聴力検査を受けているが、聴力は10デシベルで悪くなく、言葉のでないのは、環境的な問題ではないかと云われているということ報告。本児は、このとき、祖父にだかれていたが、帰りに治療者が「Sちやんさようなら」というと、手をふり、かなり大きい声で「バーバー」という。10月16日にT先生より、「当科で検査の結果、聴力はほとんど正常で、聴性言語障害とは思われませんので、現在神経科に依頼して、心理テストと知能検査を待つております」という報告があつた。

(3) 36年11月1日

母親が連絡なしに本児(既に3:1)をつれて来所し、「I大病院で耳は悪くなく、自閉症ではないかといわれて、現在、精神科の方で、他の幼児二人と遊びながら観察されている。最近人なれがしてきたようだが、治療室では母が一緒に入つていないと不安がる。言葉は依然としてでていないが、アーアー声は大きくだす。絵本をみながら、母にもの名前を云えと、母の口に手をやる。動作で最近こんにちわをするようになる」と報告。動作で自分の意志を表現する面では、かなり進歩が見えているように思われる。帰りにこの前は「バーバー」といつていたのが、このときは手をふり「アーアー」

というが、ちやんと治療者の顔をみている。

(4) 36年12月20日(夕方)

母親だけがまた連絡なしに来所(本児は風邪をひいているため連れて来なかつた)「最近バスにのつて、家の近くの保育所へゆくようになった。しかし、母からはなれず、母がちよつと廊下にでても泣く。友だちとは全然交わらず、他の子どものすることをみたり、はなれて、真似したりする。紙芝居は喜んでみている。お弁当は喜んでもつてゆき、お弁当箱も本児は非常に気に入っているが、決して食べようとせず、みんなの食べるのをニヤニヤしてみているだけ。最近余り大きい声を出さなくなつたが、要求はすべて母の手をひつぱつて行く。母に絵本をよませて、母がまちがえると『ちがう』という動作をする」ということであつた。治療者も本児に友だちが必要なことを前から話しており、本児は保育所へゆくことは非常にたのしみにしている様子なので、続けるように指示した。

(5) 37年3月9日(夕方近く)

母親がまた連絡なしに本児(3:6)をつれて来所。この時、本児は治療者の研究室の入口で、母にとりすがり、ちよつと不安げな様子をしたが、治療者が誘うと、どんどん入室し、「アアア」と大きな声を出しながら窓に寄つてゆき、東京タワーの方を指さした。全体にかなり成長した感じで、治療者及び同室の先生に相当の親しみをあらわした。治療者が坐っている机の上のお菓子の空罐を指し、「エーエー」といいながらうれしそうにあけてみたり、治療者が玩具の汽車をうごかすと、すぐ自分もうごかしてみたり、両足でトンネルをつくと大変喜んで、自分でも、足でトンネルをつくつて、その間を汽車を通らせたりして遊んだ。母が本児が最近(ひらがな)と(数字)をおぼえたというので、クレヨンで画用紙に本児の名前、数字をかき、「『う』はどれ?」「『2』はどれ?」などときくと、治療者のそばによつて、その字を指し示す。保育所へずつと通う他、前からの観察治療を大蔵山でつづけているが、保育所ではやはり母からはなれず、友だちの仲間へ入れない。ただ、一人だけ話のできない子どもにくつついてゆくようになった。お弁当もすこしは食べるようになったということである。前に云つていたマンマ、バーバーも全然でこなくなつてしまつた。母親は、何とか早く言葉がでるようになればよいと、ますます焦せるようになった。当研究所

での個人治療を希望したが、治療者の時間が一杯であつたため、暫く待つてもらふ事にした。そこで母親は、近所の保育所にも満足していなかつたので、治療者とも連絡のとれる当研究所の家庭指導グループ(精神薄弱児のグループ)に入ることを希望し、治療者は必ずしも本児に適当と思わなかつたが、母親は4月よりこのグループに参加して本児を通わせることにした。本児は、I大病院の指示で、精神安定剤の服薬をつづけていたが、治療者は、治療をひき受けるにあたり、更に、脳波検査、知能検査を受けるように指示した。

(6) 37年4月12日(本児3:7)

A病院脳波室で、脳波検査を行つたが、脳波所見では異常は認められず、担当のI先生も、本児の全体の様子をみて、自閉症ではないと思うと云われた。

(7) 続いて4月23日

当研究所で、乳幼児検査を行つた。発達指数は59とでたが、発達輪廊では、学習能力だけは年令並であることを示した。検査者の報告では、「(1)母からはなれない。(2)自分のしたこと、みつけて嬉しいことなど先づ母に『アア』といつてしらせようとする。(3)興味のないものには応じないという態度がみられた」ということである。

○1年間の時折の母親の報告や観察で、“本児は、①耳は完全にきこえている。②知能はテスト結果では低くでているが、実際は、もつとよいという事が推察される。③脳波所見では異常がみとめられない。④ことばはでないがいくつかのおんがでており、理解力、学習能力はよく、おぼえようという意欲がある。⑤意志表示ができる。⑥始めに母親が他人とのコミュニケーションがないように思うといつたが、コミュニケーションはもつとのびる可能性があると考えられる。⑦意志的な模倣能力がある。⑧自閉症的傾向らしきものがあるが、自閉症とは考えられない”ということがわかつた。予後は大分よいと思われたので、治療の対象としては年令的に少し早いと考えられたが、母親も焦つているし、言語面からは、刺戟を早く与える方がよいと考え、治療者の方の時間があいた6月末から、家庭指導グループに通うかたわら治療を始めてゆくことにした。本児は家庭指導グループは、自分の幼稚園と思い、喜んで通つていたが、家庭指導グループの先生の報告では、本児は、友だちと交わらず、いつも一人行動で相当ひどい状態であるということであつた。

#### IV 父親 と 母親

父親は非常に子煩悩らしく、家でもまめによく子ども

の世話をし、遊び相手にもなつてくれて、本児も父親の

方が好きである。

神経質なところがなく、ゆつたりした感じの父親である。

母親はきれいずきで、きちょうめんで、表面いつもニコニコしているが、本当の自分の感情は正直に出さないという感じの女性である。子どもについて語る時、いつも同じ調子に、まるで他人ごとのように笑いながら

話す。子どもを非常に赤ちやん扱いにして、語りかける時、幼児語をつかい、何でもやつてあげて過保護にしている反面、後にカウンセラーに語るように、始めのうちは、自分の気に入らぬ子どもであると非常に拒否的であつた。治療者の前では、いつも甘やかしている面が目立っていた。

## V 治療経過

37年6月22日、本児が3才8ヶ月の時より二階の個人治療室で、午前中、毎週1回、1時間の治療を開始。40年3月22日の終結まで103回の治療が行われた。

### 1.

第1回から5回目までは、母とはなれたがらず、しがみついたりして、入室をしぶつたが、6回目からは、自分からすすんで入るようになった。家ではほとんど玩具遊びをしないということであつたが、治療室では、クレヨン、のりもの、レール、文字あそびなどに興味をもち、4回目までは、手にとつて、中や裏をみたり、ただ並べたり、ふつたり、たたいたり、開けたり閉めたり、口へもつていくことが多かつたが、5回目から自動車をうごかしたり、ものをのせたり、レールを並べたりして、遊び方が非常に動的になつてきた。治療者とは既に何回か逢つていたが、治療者に対しては、第1回目だけは、治療者が話しかけても、余り応ぜず、時々自分から「アー」とか「エー」といいながら何か示す程度で、また、治療者が本児の身体にふれるといやがつてふりはらつたりしたが、既に2回目からは、治療者に対して非常に積極的な態度を示してきた。治療者のそばに寄つてきて、玩具の自動車の字やナンバーを指で示して、「エーエー」といつたり、治療者がその字を続むと嬉しそうな顔をし、ペトカーをうごかしてくれるよう要求したり、治療者が「運転手さんどこにののかしら？」というとき「アー」といつて指で示して応じたりするようになった。また、治療室の窓からテラスを通る人がみえると、あそびをやめてじつと見たり、男の子が通つたとき、ニヤニヤ笑つて窓ガラスに寄つていつて目で追つたりした。このような様子をみると、自閉症の問題があるようには考えられなかつた。

しかし、治療を始めてから特に気づいた大きな問題は、本児が治療室で遊びにあきてくると、「ウーン、ウーン・グドゥ、グドゥ・ガジャ、ガジャ」という奇妙な音をだす

ことがはげしくなり、それと同時に、必ず手に小さな玩具（汽車のレール、プラステイックの小さな電車、つみ木、ピストル、木製のトンネル、指人形、電池など）をもつて、指先でこまかくふる動作を続けることであつた。多くの場合、右手であつたが、時には左手に持ちかえたり、両手で持つこともあつた。両手で自分の顔の前でふつて、時々顔にあたり、びつくりしてその部分を手でなでて、また同じことを繰り返すこともたびたびであつた。この動作は椅子に坐つたままですることもあり、日によつて部屋中をたえず歩きまわつたり、前方へつんのめるようにとびはねたり、走つたりしながら続くことがあつた。「ウーン、グドゥ、グドゥ」という音は動作に関係なく、急に高く大声で発したり、或いは小さく低く発したりした。ただ、「グドゥ、グドゥ」という音が早く発せられる時は、ふる動作の速度も早くなることがあつた。そして、時々ふつているものを、自分の口、胸、腕にそつとあてたりすることもあつた。この動作が始まると、本児はまるで放心状態のようになり、目も何となくうつろになり、視点も定まらないようであつた。この動作に夢中になっている時、治療者が「Sちゃん！」と名前を呼んでも始めのうちは全然応じなかつたが、回数を経るにつれて、治療者が玩具に興味をひこうとしたり、「あつ、ひこーきがとんできた！」などと話しかけたりすると、すぐに反応するときもあつた。この動作は、始めの5回位までは、治療時間の終り近くから始まつていたが、段々に、入室後5分位から15分位して始まる時もあり、治療時間中ほとんどやつているとき、全然やらないときと、87回目までは、殆ど毎回この行動のいろいろの変化がみられた。母親は治療が始まるまで、この行動について特に報告しなかつたが、治療者がたづねてみると、保育所ではやらないが家でもあきてくるとこの行動がはげしく、家ではもつばらハンガーをふつているということであつた。言葉のでないことと、この行動とは、何か関係があるのだろうか、これは何か癡癡的なもので、本児の意志にかかわらず自づと始まつてし

まう行動なのだろうか、それともやはり自閉症の子どものもつ習癖と同じものなのだろうか、この問題は、治療者、カウンセラー、その他本児の相談にあづかつた幾人かの先生方の長い間の疑問になつた。もう一つはつきりしたことは、前述の本児の歩き方が前のめりになるのは、足に軽い麻痺があるためで、また、指先にも麻痺があつて、全然力が入らず、ボタンをはめたり、ブロックを指し込んだりすることができないということであつた。

治療を始めて、1ヶ月間、本児の時間が終ると、母親が待ちかまえたように治療室に入つて来て、何かと本児の問題について20分位話し合つていたが、母親は、本児はやはり自閉症ではないのかという不安が強く、治療者も母親のカウンセリングが必要なことを痛感し、依頼するカウンセラーについて考慮していたが、たまたま丁度1ヶ月後、母親は同じ家庭指導グループの母親から話をきいて、是非、精神科医のS先生に一度診ていただいて相談したいと申し出たので、7月27日、S先生に相談していただくことにした。S先生の意見では、本児は、はつきり自閉症とは云えないが、たしかに母親に非常に問題があるから、母親のカウンセリングも必要だということを確認されたので、早速、権平(カウンセラー)の時間のあくのを待つて、9月からカウンセリングをすることになつた。

## 2.

以下、治療6回目よりの治療経過を続けて述べてゆくが、主として、本児の①全体的な成長面にみられた特別の変化、②はなしことばの発生状態、③「ウーン、グドグドウ」の奇妙な常同行動の消失の過程の三点にしばつてゆきたいと思う。本児は、こちらから話すことばは、すべてよく理解することがわかつたので、治療者は、本児にも、ふつうのこともに話しかけると同じように話しかけ応答するように心がけた。

第6回目(3:10)には、一度も「ウーングドウグドウ」はやらす、家具セット、色テープ、パトカー、汽車で、始めから終りまで非常によく遊び、よく笑つた。治療者に何かやつてもらいたい時は、治療者の手をひつぱるようになった。母親は、家でもこの頃、母親とお家ごつこを面白がつてやるようになったと報告。8月中もずっと休まずに通つてきた。

第8回目の9月7日より母親のカウンセリングも開始した。この回から12回目位までは、のりものの玩具で遊ぶことが多かつたが、電話でも遊ぶようになった。受話機をとりあげ、声は出さず、口だけはうごかして、治療者と話すまねをした。「ウーン、グドウグドウ」は相当はげ

しく、出す音も、「エーエー」「アーアー」以外に「アウー」「アイー」「アイエー」のような母音の組み合わせの繰り返しが続いた。12回目から、治療室へゆくときは、自分から治療者の手を取り、しつかりつかんでひつぱつてゆくようになり、玩具など、出し難くそうなとき、治療者がたすけようとする、「エー」といつて、治療者の手をはらいのけたりするようになった。

13回目には、母と別れるときに、また大きい声で「パーパー」というようになり、この回以後大分変化が目立つてきた。救急車やダンプカーなど大きいのりものを、床の上で走らせたり、靴をぬいで、自分で乗ろうとしたり、各玩具についているマークや字を一つ一つ、治療者にくり返し云わせたり、ゲームのカードの説明をさせたり、指人形で、治療者が「こんにちわ」「うさちやんあそびましょう」とやると、自分もそれに応じて、一生けん命、指人形を歩かせるまねをしたりした。また、ひこり機がとんでくると、窓のところへかけよつて、「アーアー」と指さして治療者におしえ、すぐ近くの幼稚園からレコードがきこえてくると、じつと耳をすませてきき入り、とまる度に窓ぎわへゆき、治療者に「エー」とか「アー」といつて、とまつてしまつてつまらないという意志表示をした。しかし、この頃、靴をぬいでしまい「ウーン、ガジャガジャ」をいいながら床を歩きまわつたり、とんだり、ねそべつたりすることが多かつた。それでも、15回目には、「お時間よ」というと、治療者をわざわざ椅子にすわらせ、玩具の時計をもつてきて、もつと遊びたいという意志表示をした。

16回目(11月9日)(4:3)には、漢字をおぼえ、汽車にかいてある「大阪」「東京」、電車の「山の手線」などの字を「エーエー」とさして治療者に続ませ、治療者がきく字を自分で指さしたりした。本児はこれより益々字に興味をおぼえ、びつくりするほど早く、多くの字をおぼえていつた。

19回目(12月7日)からは、自分から先に部屋にかけこむようになった。漢字に興味のでてからは、絵本を何冊かだしてきて、自分で治療者の人さし指をつかみ、知りたい字のところへもつていつて、治療者に云わせることも始めた。この回では、治療者が「百一匹わんちゃんゲーム」の盤の絵の話をする、「エヘエヘ」声をだして笑い、最後にピノキオの話を読んで、とたのみ、治療者の横にびつたりと坐り、絵をみながら、じつとおとなしくきいていた。おじいさんとピノキオがくじらから出てきたところ、ピノキオが、鳩から海へとびおりるところでは、非常な興味を示し、「アーアー」といつて、足をバタバタさせて大変うれしそうに手をたたいた。自分

の意志、感情の表出が非常に顕著になってきた。こういうところは、全くふつうの子どものかわらなかつた。

21回目(12月21日、昭和37年の最終回)では、しばらく自動車で遊んだ後、猿の人形をふりまわして「ウーン、グジュグジュ」を始め、治療者のよびかけに応答しないで、歩いたり、走ったり、坐ったりした。途中、机上の犬をみつけ、猿をおいて、犬のしつぽをもつてふり始めた。靴をぬいで歩きまわったり、机に腰かけたりして「ウーン、グドウグドウ」をつづけ、治療者が注意をひくつもりで、輪なげ遊びを始めると、寄ってきて輪を二つとり、犬を床に捨てて、輪を二つ一緒に、または片方、かわりばんにふりつづけた。この回より、本児はすっかりこの輪なげの輪に固執してしまい、この回が終つたときも、この輪をはなさず、一つだけにぎつて、階下の母の処へおりにいつた。何度も母にいわれて、やつとしぶしぶ、治療者にかえした。

22回目(38年1月11日)(4:4)入室して、すぐレールの2本つながつたのを机上にもつてきて、治療者の顔を見て、2本指をだしてみせた。この時より、数に興味のあることを示し始め、いつも指で教を示した。それから昨年輪なげのことを忘れずに、戸棚上の輪なげの輪を、椅子をもつていつてそれにのつてとり、すぐまたふり始めた。この時間中、ずっと何をしても、輪をにぎつたまま、帰る時もまた、階下までもつておいた。

23回目には、棚の上のものをとるときに、治療者に抱いてくれというゼスチャアをやり、治療者にだかれて欲しいものをとつた。最後に絵本をみるときは、自分からぎつさと治療者の膝の上のにつてきた。前に母親も述べていた他人にさわられるのをきらうという点は、全く消えてしまった。母親の報告では、最近「ウーングドウグドウ」をいうとき、足ぶみもするようになったことであるが、治療室では、この足ぶみは暫くしてからみられるようになった。しかし、余り長く続くことはなかつた。またこの頃から特にのりものの絵本が面白くなり治療者に何回も種類や、そのちがいを云わせたりした。気に入つたピノキオのはなし、「トラックとねずみ」のはなしなどは何度も読ませた。殊にこの項、「機関車ピーターの脱線」のはなしが非常に気に入り、「いたいよう、たすけてー!」というところは何度も読ませ、そのたびにおかしくてたまらないようにエヘエヘ声を出して笑い、自分で額に手をあてて「いたい」というジェスチャーやエンエン泣くまねをし、母のところへもどつてきた時も、その動作をやつてみせた。5回ほどつづけて、毎回くるたびにこの話の出ている本を自分でさがしだし

て治療者のところへもつてきて読ませた。この項、「ウーン、グドウグドウ」をしているとき、間に、ときどき、突然「エヘエヘ、イヒイヒ」声を出して笑うことがあり、こんなとき、治療者は、やはり、何か精神病の症候があるのではないかと心配になつた。少しづつ進歩がみえてきている反面、この奇妙な常同行動はなお依然として続くので、カンセラーとも度々話し合い、このままの治療をつづけてよいものだろうか、われわれの手許で、このような子どもを取扱つていてもよいものだろうかと随分悩んだのである。たまたま、また母親が、今度はO大の小児精神科医のH先生に診ていただきたいと前年から希望しており、丁度3月始めに診ていただくことになつたが、治療者はその前にH先生に逢い、本児は、自閉症ではないと思うが、自閉症的な子どもについて、色々御教示を願つた。その折、本児の奇妙な行動が非常に気になつていたので、そのような行動について話し合つていた時、H先生が「こういう子どものくせは、治療者が一緒になつて真似をしていると、不思議とやまつてしまうことがあるんですよ」と語られた。治療者は、本児のは、どうも自閉症の子どもの習癖ともちがうように思えるし、そんなことは信じられぬことと思つたが、妙にこのことが頭にこびりつき、本児のこの奇妙な行動もそんなことでやまるだろうか疑問に思いつながらも、一方では、もし、やまるものならためしたいという気持を押えることができなかつた。

H先生に診ていただいた結果、本児は、自閉症であると診断され、一年間つづけていた精神安定剤の服用はきつぱりやめるように指示された。

29回目(3月8日)(4:6)いつものように治療者の手をひつづつて、階段をあがり、部屋の番号を見上げて「アー」とたしかめてから入室。すぐに戸棚にかけよつて、輪なげの輪をとり、ふり初めた。輪をふりながら「機関車ピーター」の本をさがし出し、また何度も治療者に読ませて、「エヘエヘ」楽しそうに笑つた。それが終ると、椅子に坐つたまま「ウーングドウグドウ」といいながら、はげしく輪をふり始め、なかなか他の遊びを始めようとしなない。そこで治療者も輪を手にもち、本児の斜め向いに腰かけて一緒にふる真似を始め、また「ウーングドウグドウ」という音もまねてみた。本児はしばらくの間、何も気づかないかのように治療者には無関心に、声をだしてふる事に夢中になつていたが、突然しづまりかえつたとおもうと、非常に神妙な顔をし、涙をホロホロ流し、身をよじり、まるで成人がこの世にこんな悲しみがあろうかと悶え泣くように、声をしのばせて泣き始めた。椅子から立ち上り、机と壁のせまい間に

しやがみこんで、また悲しげに、もだえ泣き、そして戸口へかけよつて部屋を出てゆこうとした。この予期しない反応に、治療者も全くびつくりし、本児のところへかけよつて、「せんせいがまねしたので悲しくなつたのね」とやつと云えたくらいであつた。本児はしばらくシクシク泣いていたが、間もなく、自分の手の甲で涙をぬぐい、もとの場所にもどつて、靴をぬぎ、またしばらく、「ウーン、グドウグドウ」をつづけたが、この時は治療者もやるにまかせ、机上のトランプで遊んでいると、本児が治療者のところまで寄つてきたので、「これは王子さまよ」「こつちが女王さま」と話しかけると、本児もトランプを手にとり、笑いながら数を合わせたりして、時間の終りまで遊んだ。この出来事は、治療者にも不可解で、非常に不思議な現象に思えるが、「輪をふるまねをした」ということは、本児に対して、一種の行動に依る reflection の作用をしたのであろうか。ずつと経過をふりかえつてみると、この出来事を境として、本児が凡ゆる面で、非常な進歩をし始めているのである。また、この「ウーン、グドウグドウ」をいいながらものをふるという動作は、どうも痙攣的なものでなく、また本児の無意識な行動でもなく、本児が統制しようと思えば統制し得る行動であるということもわかつたのである。

この回以後、本児は面白いことに入室して輪なげの輪を二つとると、ときおり治療者につつ渡すようになり、この出来事以後しばらくは、「ウーン、グドウグドウ」をやりかけて、じつと考えこんだり、やるまいと努力しているようにみえることがあつた。

31回目から「お時間よ」というと「アー」（イヤーの最後の音節らしくびびく音）と大声で帰ることを拒否するようになった。この「アー」という力強い音の出はじめは、本児の言葉のではじめのきざしとして、重要な意味を持つように思われる。

32回目（4：7）から、治療者をテラスに閉め出したりして、おおいにからかうようになり、また、治療者が本児に汽車をつなぐことを頼まれて「あーひもがいるかなー」とか「はさみがあるわ」などと、ひとりごとのようにいつても、おおいそぎでそのものをもつてくるようになった。またこのときから、何かきくと「エツ」という返事が出るようになった。

34回目からは、ドアがあくと、自分から閉めにいつたり、隣の部屋で音がするとのぞきにいつたり、機関車の電池を自分からすすんで出したり入れたり、意欲が盛になつてきた。

しかし、この頃、母親はまだ、本児の言葉のことが心配で、5月始めにⅡ大の小児神経科を訪ねたり、Ⅴ病院

のⅠ先生を訪ねたりしている。Ⅱ大では聴啞ではないかと云われ、Ⅴ病院では、運動性失語症ではないかと云われたが、いづれからも、そのうち言葉は出るでしょうと云われたということである。

35回目（5月17日）（4：8）入室して部屋が暗いので、治療者が「電気つけましょうか」というと始めて、「ハー」と息をはくような音で、無声音であるが、はつきりした返事の音を発した。これからずつとしばらく返事には、この無声音の「ハー」がつかわれた。今回は、昆虫ゲームの虫の絵の描いてあるカードに興味を示し、一つづつ治療者に虫の名前を云わせた。少し先へゆくと、一つ一つの虫が「よくとべるか」「さすといたいか」「すぐつかまえられるか」ということを「アー」とか「エー」とかいいながら手まねで治療者にきくようになった。本児がこのように、もの名前を何度も云わせたり、本をくり返しよませたことは、その時、本児にはすぐ云えなくても、本児にとつて、たしかに非常に必要なことであつた。治療者も、ふつうの子どもでも、自分でいえるようになるまでは、言語を大脳皮質に蓄えてゆくことを考えて、本児にもくり返し云つてきかせておくことの重要なことを何時も念頭においていた。やがて、本児がはなせるようになったとき、すべて治療者に云わせていたことを、本児は正確に記憶して話すのをきき、くり返し聞かせておいて本当によかつたと思う。

39回から41回までの3回は、本児は、治療室へ入りたがらず、もつぱら室外の探索に終始した。地階から屋上まで、治療者と手をつなぎ、ゆきあたるもの一つ一つの名前をたづね、書いてある字を読ませ、部屋の前になると、何をやる部屋かたづね、テラスでは、しやがみこんで、駐車場に出たり入ったりする自動車をじつとあかず眺めた。屋上、テラスではときおり手をふつて「ウーングドウグドウ」をいいながらとびはねることがあつた。

41回目では、外にまで出て、駐車場の自動車のまわりをまわり、字を読ませたり、ガラスの部分、金属の部分の区別を説明させたりした。

43回目（7月19日）（4：10）の終り頃、文字パズルのこまを机上でならべはじめ、治療者に一字づついわせた。治療者が「これはほんのぼよ」というと自分で軽く「ぼつ」と音をだしてみる。「これは、はいしやさんのはよ」（本児が丁度はいしや通いをしていたので）といつたときも、無声音ではあつたがすぐに「はー」とだしてみせた。他の音はまだだせなかつたが、治療者が云つたあとで、自分で口だけはいつしよけんめい動かしている。帰りに母が「病院でだれが待つていますか？」

ときと、やはり声はでないが「ばば」と答えた。

44回目位からは、遊び方も非常に構成的になつてきた。例えば、人形をつかつて2人の子どもがけがをしたので、救急車で病院に運ばれ、先生に診てもらつて、看護婦さんに、ほうたいをしてもらつて寝る。1人は早くなおるが、もう1人はなかなかおらないでまだねているところ。プラモデルの飛行機を日本の飛行場に並べて、一機づつ海を越えてアメリカの飛行場へとばせるところ。その途中で低空飛行、旋回、急降下、宙がえりをしたり、富士山の上空で故障するところなどをやつてみせた。こういう時、本児がやる動作に、治療者が説明を添えてゆくといふ、本児は非常に面白がつて、随分こまかい動作もやつてみせた。「低空飛行」とか「旋回」とか「急降下」などという言葉の治療者がつかつても、本児はよく知つていて、正しくその動作をやり、やはり何度も治療者が云うことを要求した。本児が飛行機をとばせている時、よろけたので治療者が冗談に「あら、よつばらい運転ね」といふと本児は笑い出し、本当に自分でよつばらい運転のまねをしてみせた。後に本児は自分で「低空飛行」とか「急降下」といふながら飛行機をとばせて遊ぶようになる。このような遊びに夢中で、本児は50回目頃までは、余り「ウーン、グドウグドウ」をやらなかったが、3回目づつづけて、気にいらぬことがあると、机上の玩具を全部床にひきずり落したり、戸棚の玩具をあらいざらいひつぱり出して、床中にまきちらしたことがあつた。これは、本児の言葉がでだしたので、母親が家で、夢中で教えこんでいるためではないかと思えるふしがあつた。

50回目では、何かとつてくれといふとき「パーブ、パーブ」といふようになり、52回目(10月に入り、丁度満5才になる)に、プラモデルの飛行機をとばすとき、自分で「ウーン」と声をだし、治療者が「いま富士山の上をとんでるところね」といつたとき、やはり無声音であつたが、はじめて「フージ」といふ言葉を発した。丁度この日母親が前日書いた本児の言葉のリストを持参したが、家では既に富士山を「フ・ジ・アン」と云っている。その他パパ(パパ)ジジ(おじいちゃん)アーババ(おばあちゃん)オ・ジ・アン(おじちゃん)ホオ・ホ(ぼく)ツツチ(いつちくんという友だち)プ・タイ(プディング)オ・チ(おうち)パン(パンタグラフ)ポツン(ポーンと人をはねるの略)パン・パン(ピストルの音、手まねと一緒に)パツパツ(おもちゃの電気がパツパツとつくところ)チイチイ(鳥のなき声)があるが、しかし、声のでるのはまだ「パパ」だけで、それもはじめに必ず「アー」と声をだしてからという

ことである。この頃から急にことばの面が著しく進歩し始め、治療室でも遊びながらパンタグラフをさして無声音ながら「パーパー」、トランプのパパアを「アババー」(これだけは有声)、自動車の前方を指してブーブー、東京タワーをみて「ターイ」(たかい)など盛に発するようになり、でんでん虫の歌も母と一緒にうたうようになった。10月末、言語治療専門家のO大のT先生に治療室で治療者と遊んでいるところをそばで観察していただいたが、本児はいつもとかわらず、治療者と野球ゲームをしたり、T先生と絵本をみながら先生のからかいに応じたり、自分もふざけたりして大変楽しそうであつた。

55回目(11月1日)治療者が先にへやに入っていたが、あとから部屋へ入つてくるときに、始めて大きな有声音で「のだせんせい」「権平せんせい」といふながら治療者に近づてきた。動物の絵本をみながら治療者の質問にも「はつば」「ピョンピョン」などと声をだして答えられるようになった。また絵も指先に力が入らず、母親はいつまでも描けないと心配していたが、この回で始めて、まだ非常に幼稚ではあつたが、富士山とお日さまの絵を描いた。言葉がこのように出はじめたが、この回でも、まだ時々輪なげの輪をもつて「ウーン、グドウグドウ」を始め、放つておくといつまでも続けたが、名前をよぶとやめて治療者のそばに寄つてきた。11月に入り、本児は家庭指導グループの方はやめて、また、もとの近所の保育所へゆきはじめた。

57回目では気に入らないことは「ダメエー」と非常にはつきり云うようになり、次回58回目(12月6日)では、返事をいままで「ハー」と無声音でいつていたのが、はつきり有声音で「はいー」といふようになつてきた。自動車の「じどー」「とうきょうタワー」「くれよん」「かみ」「ひおこーき」「ジェットき」のことばも使うようになった。しかし、抑揚はふつうでなく、どの語も語尾に力が入り、高くあがつてしまういい方であつた。

59回目では、治療者が「あぶないわ」とか「東京タワーたかーい」といふとすぐそのあとまねしていうようになつた。数も、もう指はつかわず、「ひとつ」「ふたつ」とか「パスがみつつ」といふようになつた。この頃も、まだ入室すると輪なげの輪を二つとり、一つを治療者にわたし、自分は遊びの間で、「ウーン、グドウグドウ、アイー」をいふながらふることが続いた。12月末(5:3)、再び、O大のT先生と遊んで観察していただいたが、学習意欲が非常にさかんで、先生の質問にもよく応答し、色の名前も「あか」「きいろ」「あいいい

る」とどンドン云えるようになり、「ダメー」の他に「ヤダー」「まだ」のことも非常にはつきり発するようになった。帰る時間になると、「もうおしまいになりました」と長い文句をいい、待合室へ来て手を洗おうとして水が出なかつたとき、自分から「だんすい」といつて笑つたりした。

61回目(昭和38年最終回の日)には、入室すると、すぐ治療者にまた輪なげの輪をとつてといい、輪をわたすとすぐにいつもの行動を始めたが、治療者がかまわず話しかけると手をとめて「はいー」とか「パンツあります」「パンツありません」などと質問に答えることができた。この前まで「ダメー」といつていたのが「ダメダ」(ダメダ)になり、また字も、漢字、平仮名、片仮名をほとんど全部、みてすぐに、非常によくよみ、母の所へもどつて、もう帰る時間であるのに、治療者やカウンセラーの前で、本をひろげて、いつまでも読みながつた。また、おむつも、この頃やつと全部とれるようになったのである。

62回目(昭和39年1月10日)には、逢うとすぐ「おめでとう」という、お休み中、大分家で教えられたらしく数も10まで数えるようになり「まる」「しかく」「さんかく」「ながしかく」の形も自由に云えるようになった。

63回目から遊び方も更にぐんと活潑になり、プラモデルの軍艦と飛行機で「バン、バン、シューシュー」といながら戦争ごっこをやつたり、バスとトラックを競争させ、勢いよく衝突させたり、治療者と部屋中ゴルフのたまをおいかけて走りまわつたりして身体を大きく、よくうごかすようになった。また、前やつたように、文字あそびのこまの字を治療者に云わせて、声をだして「と」「つ」「じ」「ほ」などと真似、絵本をよく治療者に読ませていたのを、この回では自分で始めからじつと目読し、時々治療者が内容について質問すると、「おみづ」「がいこくのトラック」「にほんのバス」などよく答えた。

66回目(2月14日)(5:5)少し治療室で遊んだあとテラスへ出て、そこから外へでて、とうとう近くの公園まで治療者をひっぱつていつた。この時、本児の治療者に話しかけることばで、いくつかわからない言葉があつたが、公園では石段をおりるとき25まで声を出してかぞえ、治療者が目につくものを「これは橋」「これは柵」と云つていくと、本児も「はし、はし」「さく、さく」と歩きながら一生けん命くり返し、立札の字は、自分で読んだり、治療者に読ませたりした。

70回目(3月13日)(5:6)になると、「こんど

は……」「……してみる」「これよんで」「これとつて」という語彙が増え、また、帰るのをいやがり、なかなか遊びをやめないで、治療者が「もうお時間よ」という度に「まだー」「だめだよー」「ずっとあそんでいようよー」と大声でどなつた。

このあと本児は風邪で休んでしまい、4月からふつうのM幼稚園へ通園するようになって、馴れるまでというので、4月20日まで続けて休んだが、その間に結構友だちもでき、72回(4月20日)では、「これどうしたんだい」「へびみたい」「おいといて」という言葉を使うようになり、73回(4月24日)(5:7)からは「これなーに?」「はたるはどうしてどうして(いつも2回くりかえした)光るの?」「くつわむしいたい?」というように非常に質問が盛になつてきた。まだ抑揚は、終りの方が急激に強くあがり、ひつばる調子であつたが、丁度ふつうの三才児の言語発達の段階に類似しているところがみられた。また、自分で何か長く云おうとするときには「えーと、えーと」が入るようになった(これは1ヶ月後には「えーとね」というようになる)

75回(5月11日)頃からは益々語彙も増え、治療者とよく対話もできるようになつたし、ばばぬきをしながら「ババアいるぞ、いるぞ、せんせいのまけー」といつたり、「だめだねー」「おかしいなー」「あいちやつた」「こわれちやつた」と遊びながら独語も云うようになった。母の所へもどつてから母に「今日は何してきたの?」ときかれ「本、一つよんだーべんぎんおやこ」と報告もできるようになつた。更に1ヶ月後の78回(6月1日)頃からは、野球ゲームをしながら「こんどわね、ながしま」「あーファウル」「ヒット」「ホームラン、2回のおもて1点、2対2!」とたのしそうによくしゃべるようになり、語彙面では、殆どふつうの子どもと変らなくなつてきたが、抑揚はまだおかしく、カ(ガ)行音、サ(ザ)行音がほとんどタ(ダ)行音になつてしまい、ラ行音、ハ行音は、まだ完全ではない。また、輪なげの輪をもつてする「ウーン、グドウグドウ」の行動は、まだほとんど毎日少しづつではあつたが、前述のように87回(9月7日)までつづいた。自分で輪を二つとつて一つを治療者にわたしたり、治療者に「とつて」とたのみ、治療者が二つわたすと「一つでいい」とはつきりいつて、一つ返したり、自分で二つとつておいて床に投げすてそのままつかわなかつたり、遊びに夢中で、今日はやらないと思つていたら突然思い出して輪をとりいつたり、帰えりには大低もつてゆきたがつて「もつていくー」と大声で主張したりした。しかし、この頃は、この行動を始めたとき、治療者が遊びに誘うと、やめて

遊びに入り、そのまま忘れてしまうことが多くなった。88回目(9月21日)(6:0)からは、この奇妙な行動は治療室ではみられなくなり、94回目(11月30日)に治療者とロケットゲームをやっている最中、治療者がこまを動かしている時、急に椅子から立ち上つて机のまわりを、まわりながら暫くやつただけで、このあとは、治療終了の日まで、全くみられなくなった。母の話では、本児は時計も読めるようになり、(治療室でも「いま何時何分?」を盛にくりかえした)家では、幼稚園から帰ると玩具遊びをせず、「ウーンゴドウゴドウ」をはげしくやりだすのでその時、母親が本児に「ウーンするのは××時までですよ」とか「15分だけですよ」とか制限すると、時計をみてそれを守るようになったということである。そこで母は、治療時間前にも、「今日は野田先生のところでやるんじやありませんよ」といいきかせていたそうである。本児は、時間制限のことを理解し、この行動をコントロールすることを学習するようになって、治療室でもやらなくなったのであろうか。丁度この頃から更におしゃべりの量も非常にふえて、遊びも豊富になつてきたので、退屈することがなくなつたためでもあろうか。

84回(7月13日)のあと、しばらく夏休みに入り、8月20日(5:11)にWisc知能診断検査を行ったが、言語検査ではIQ104動作検査ではIQ84で、途中あきてしまつたので、全検査IQは93+ $\alpha$ という結果になつた。まだ全体的にみて、赤ちやんぼい感じで、指先の方も依然として弱かつたが、遊び方も知的になつてきて、ゲームのルールもよく理解して守り、英語の教え方、単語もいくつかおぼえてよくつかうようになった。

92回(11月9日)からサ行音のうちの[ʃ]の音がよくでるようになり、95回目(12月7日)では、絵

本をよんだり、紙芝居をすると、「はねあげるって何のこと?」「勝負ってどういうこと?」「ふうりんってどんなもの?」と自分のわからないことばについてよく質問するようになり、治療者が読みながら途中で「公しやくつて知っている?」とか「徐行つてわかる?」ときくと「はいー」とか「しつてる」とか「わかりません」と答えたりした。段々学令が近付き、後述するように、両親は本児の就学について大分迷つたが、幸いW小学校へ入学できそうで、母親は一生けん命テスト問題を教えこんだらしく、99回目(40年1月25日)(6:4)では、本児は治療者とかるたとりをしていたが、始めのうち治療者に「つぎの札をよんでちょうだい」と云つていたのが、途中から「次の問題を云つてちょうだいよ」「きのうのつづきの問題をやりましょうよ」といつたりした。2月一杯は、本児はまた風邪で休んでしまつたが、3月一杯は元気で通つてきた。カ(ガ)行音がまだよくでなかつたが、大きい飛行機で戦争ごっこをしたり、治療者と戦艦ゲームをしたり、積木をガラガラ全部たおして更に足でけとばしたり、なかなかaggressiveな遊び方をしたが、その反面、毎回必ず治療者の膝にのつて、おとなしく絵本の話にきき入り、質問もよくした。

最終回の3月22日には、治療者に逢うとすぐ「卒業証書ほしいの」といい、帰えりにもまたニヤニヤしながらカウンセラーと治療者の前で「卒業証書ほしいの」と云つたので、「卒業証書に何と書きましょう」ときいたら、幼稚園でもらつたのと同じつもりで、(また、われわれをからかつたのであろう)「一年間、保育を修了したことを証す」と大へんはつきり大きい声で読みあげるように述べて、われわれを笑わせた。抑揚は少しよくなつたが、まだふつうとは云えない。しかし、両親も一人前近くなつたことを非常に喜び、われわれも、この3年間をふりかえり、誠に感慨無量であつた。

## Ⅶ カウンセリングの経過

カウンセリング中の母親の特徴は話しの内容が深刻なときでも、終始にこやかな表情で話していた。これに関しては後に母親自身が語つたところによると、小学校から上流家庭の女子が学ぶ有名私立校に学んだ。その学校では喜怒哀楽を表現をしないような教育を受けた。そのため、感情の表現をしない習慣がついた。

本児に対しては、始め否定的な感情を表現し、「20円でもよいからこの子を売つてしまいたいと思つた。20円という価格は、自分の家にくる屑屋がどんなものでも20円で買っていくから本児を一番低い価格でよいか

ら売つてしまいたいという気持だつた」と話し、乳児期より夜泣きがひどく、毎夜父親と交替で床につく有様で、心身ともに疲れ果ててしまつた。そのため、何時までも自分達がつききりでいなければならないような気がしていた。特に父親は世話がゆきとどき、年令より遙かに子ども扱いをする。それが39年の12月頃、母親は、こどもを家におくと父親がどうしても赤ん坊扱いをするし、自分はまだ相当本児を負担に感じているし、又本児のためにもその方がよいと思ひ、適当な施設に入れたいと言ひ出し、精薄施設を探しまわつた。母親はそう

することが本児のために一番よい方法だと強調していた。その母親の気持を受け入れることに努め、現在の施設では、本児を家庭で養育する以上のことを望むことはむずかしいことを話し、特に本児のような言語に問題がある子どもの場合はできるだけ、家庭で育てた方がよいように考えられると話した。家庭に於ける扱いなどに注意さえすれば、本児にとってそれ程悪い環境では決してないように思われた。その点を説明し、もうしばらく家庭で育てよう、扱い方については、一緒に考えてゆこうと、勇気づけた。そして住いの近くにある普通幼稚園を偶然カウンセラーが知っていたので、本児の様子を報告し、入園させてもらえるかどうかを打診したところ、大体引き受けてもよい意向であった。母親に対して、普通幼稚園に入れてみたらどうかとすすめたところ、こんな子どもでは幼稚園の方で引き受けてくれないだろうと躊躇していたが、その後両親で再三園を訪れて本児の入園を熱心に依頼した。その結果幼稚園に入園することができ、同年令の子どもの中に入り、どうか行動を共にすることができるようになった。両親も大分本児に対する自信がでてきたようであるが、就学させる決

心は中々つかず、猶予することを希望していた。その反面、本児の言葉が少しずつでくると、あせつて、教えようとした。我々は、あせつて、教えこまない方がよいと注意したが、両親は理屈の上では解っているようでも、かなり無理に教え始めているようであった。私共は本児の39年7月頃の様子をみて、自分の興味のある事柄については、年令並以上にどんどん理解し、吸収していく点、言葉も大分多くなってきたことを考えて、多少言語に問題が残っていても、就学を猶予することが却つて本児にとってプラスにはならないように思われた。就学の問題については両親は否定的であった。しかし、本児が幼稚園生活に馴れてくると、就学させても大丈夫かという気持を持つようになり出し、両親で居住地の教育課に相談にいった。また2、3の私立小学校にいき、意見をきいてきたりして、私立のW小学校が一番本児に向くように思われた。そして両親で授業参観にいったり、先生方と話しあつて、就学させる決心がついた。そして小学校に入学できたことが、両親にとって本児に対する自信を大へん強く持てるようにした。

## Ⅶ 予 後

4月6日附で母親から手紙が来たとき、本児の手紙が同封されており、母親が今まで指先に力がないため字が書けないといっていたが、用紙一面に本児の苦心して書いた字は、相当立派であった。本児は学校へゆく日を待ちこがれているということであった。

6月2日、1年生になつて、学校の様子を報告がてら、両親と来所した。まだ幼なさが残っていたが、大分しつかりしてきた感じで「こんにちわ」というとすぐに治療者の手をにぎり、治療室に入る前、部屋の戸口にかかっている札をみて、「この字なに？」「使用中つてなんのこと？」ときいたりした。治療室では、まるで前の続きのように、早速ルールや、組み立てブロックであるのだが、指先の力も大分でてきたようで、遊びながら

非常によくしゃべつた。サ(ザ)行音、ラ行音も大変よくでるようになったが、カ(ガ)行音はまだ完全ではない。全体に抑揚は前よりよくなつてきたようであった。学校は非常に喜んで行つているとのことで、字も非常に上手にかけるようになり、両親も学校の指導法もよいと大変満足気であった。「ウン、グドウグドウ」は家ではまだやつているようであるが、学校では全然やつていないそうである。

8月の夏休み中に母親に本児の様子を電話でたづねたところ、丁度元気に学校の合宿に参加して帰つてきたところで、母はどうやら無事にやつてきた様ですと安心した様子であった。

## Ⅷ 考 察

### (1)

始め母親から本児について報告を受けたときは、先づ自閉症的傾向をもつた子どもではないかということが疑われ、次に聴覚に欠陥があるのではないかと思われたが、聴覚に障害がないことはすぐわかり、観察、治療を行つているうちに、知能遅滞でないことはつきりした

が、自閉症的傾向については、各先生方に依つて意見も異り、始めのうちは、そうであるように思える時と、全くそうでないように思える時があつたが、治療がすすむにつれて、この問題に関しては、否定的になつてきた。理解力、しゃべりたい意欲があるのにことばがなかなかでないため、聴啞ではないか、運動性失語症ではないか

という意見もあつたが、実のところ、本当の診断ははつきりわからない。また、「ウーングドウグドウ」といながら、小さいものを指先でふる奇妙な常同行動は、なかなか消失せず、この行動の原因がさつぱりつかめなかつたため、治療者は、本児の取り扱いに、非常に迷い困つたことはたしかである。たまたま第29回の出来事で、その常同行動が本児の統制できる行動であることがわかつてからは、治療室でのとり扱い方も楽にはなつてきたが、それでもこの行動に関しては、いまだに確かなことはわかつていない。ただ、第29回の出来事以来、本児があらゆる面で、そして特に、言葉の面で、非常な進歩を示してきたことは、前述のように、もしこれを reflectionの一種として考えることが許されるならば、非常に興味深い問題であると思う。本児はみたところ非常に赤ちやんぼく、固執性が強く自分の興味のないことにはなかなか反応しないところがあつたが、前述のように、非常に理解力もあり、知的面では相当の洞察能力をもつていたと解釈してよいとおもう。

## (2)

足と指先に麻痺がみられたことから、ことばがでるようになったのは、結局麻痺が回復してきたためだろうということも考えられるが、しかし、このような治療により、刺戟が与えられなかつたならば、果して、その麻痺が回復したかどうか疑問が残る。

## (3)

また、両親、特に母親の本児に対する取り扱い方の変化も重要である。本児が予想外に手のかかる子どもであり、母親にとっては自分の意に副わぬ期待に反した子どもであつたため、非常に拒否的になつたことは、少からず本児の成長に影響を与えていたことは否めない。そのためまた母親もたえず不安であつたが、本児の少しずつの進歩と、母親のカウンセリングに依る本児の扱い方の変化によつて悪循環を好循環にするようにもつてゆくことができたのである。事実、母親は、本児が進歩を示してきたとき、「最近、この児が可愛いと思うようになった」と語り、本児とのコミュニケーションもずつとよくなつていつたのである。また、両親は、本児を普つうの

幼稚園に通わせることや、小学校に1年猶予させずに就学させることに自信がなかつたが、われわれが本児の進歩の状態をみて、その方が本児のよりよい成長にプラスになる事を述べて、極力すすめて支持したことも、結果として、両親の自信を強めさせ安定へ導いたと考えられる。

本例の観察、治療は非常に長くかつたがわれわれは、本例のような診断のつきにくいケースは、是非とも長期にわたつて観察及び治療することの重要性も改めて痛感したのである。

## 〔文 献〕

- 1) Rogers, C. R. : Client-Centered Therapy, Part 1, Houghton Mifflin, Boston, 1951  
(友田不二男訳：精神療法、岩崎書店 1955)
- 2) 島瀬 稔、阿部八郎編訳、来談者中心療法—その発展と現況、岩崎書店 1964
- 3) 鈴木清編・心理療法の技術、日本文化科学社 1961
- 4) 高木四郎：児童精神医学各論、慶応通信 1964
- 5) 土居健郎：精神療法と精神分析、金子書房 1961
- 6) 森脇要他：子供の心理療法、慶応通信 1959
- 7) 高木俊一郎：小児精神医学の実際、医学書院 1964
- 8) 時夷利彦監修：現代人間学(3)人のこころ、みすず書房 1961
- 9) Axline, V.M. : Play Therapy, Houghton Mifflin Co. Boston, 1947
- 10) Travis L.E & others : Handbook of Speech Pathology, Applenton-Century Crofts, N.Y. 1959
- 11) Mildred F. Berry Joe Eisenon : Speech Disorders, Applenton-Century Crofts, N.Y. 1956
- 12) Johnson W. : Speech Problems of Children, Gruen & Stratton. N.Y. 1955
- 13) Van Riper, C. : Speech Correction, Prentice-Hall, N.J., 1956
- 14) Kanner L : Child Psychiatry, Charles C. Thomas P., 1955